

京都での台風体験から考える気象予報士の今後

日本気象予報士会 土井修二

(1) はじめに

- 1 強い台風0423号襲来時の体験談を通し
また、消防団の一員として活動した体験を元に、台風来襲時における行政サイドの出動指示の妥当性に疑問

現地固有の気象特性に詳しい

地元在住の気象予報士による、
防災行政への助言を提案します。

(2) 京都府中北部に災害をもたらす台風の特徴

- 1 発達した強い台風が、紀伊半島に上陸もしくは近海を通過
- 2 秋雨前線などにより、十分な先行降雨がある。
- 3 台風が温帯低気圧に移行する段階にあり、東西の温度傾度が急。
- 4 最接近までは風は弱く大雨、その後は雨は弱まり北よりの暴風が吹く

(3) 台風体験－消防団活動

地元消防団活動の現状

台風襲来時に消防団の一員として活動した体験事例を挙げ、台風来襲時における行政の出動指示の実態を紹介します。

【事例1】台風9019

帰宅後、午後8時から午前1時まで待機
暴風が吹くが、これといった被害なし。待機時間が長すぎる。

【事例2】台風0423

接近前から、京都にとって危険なコースであることが、ある程度推測できた。
職場から帰宅時、道路情報の不備のため、迷走、1時危機に
帰宅後も、暴風のため出動不能 風の弱まりを見計らって出動するも、大雨はすでに終わる
——待機時間が長い
翌日も出動命令——職場と防災活動が両立せず何らかの公的調整が欲しい

【事例3】台風0704

台風0423の記憶から、住民、自治体とも台風に敏感
いち早く、災害予防のため出動、土嚢配置 待機——待機中もほとんど雨、風なし
レーダーなどの防災情報を適切に理解できる関係者皆無。
長時間待機した挙句、翌日も撤収のため出動を余儀なくされた。

【事例4】台風0918

自主的な災害予防出動 待機
幸いにも中心域の強雨域はかからなかったが、災害の可能性がなくなったあとに2時間もの待機で拘束された。

これらの体験から

台風に備えての、予防的出動については意義があり、妥当であるが気象情報等を利用した適切な待機解除の判断が遅すぎる。

防災関係者も、地域の気象的特性の把握、防災情報の見方についての知識が乏しい
よって

地域に長く居住している「気象予報士有資格者」が適宜住民や防災担当者に、災害時の特性、防災情報の見方を伝授する必要があるのではないか

(4) まとめ

各地方において、災害の発生するときの状況は、その地特有のくせ、傾向があることが多く、あらかじめ過去災害時の気象などを調査、研究しておけば、ある程度まで予測可能な場合がある。

自治体においては、人員削減や広域合併により、防災担当者のきめ細かい状況の把握、災害対応が困難になる傾向にある

また、一般住民は、防災情報の見方を理解していないことが多い。

全国各地に居住する「気象予報士」によって、地元民に対する平時の気象知識の普及活動、災害緊迫時の防災担当者へのアドバイス業務などを実施することにより、気象予報士の活躍の場のいっそうの拡大と、災害被害の軽減に大いに寄与できるのではないかと考え、ここに問題提起のため、提案します。

- 1 この発表を作成するにあたり
- 2 気象庁ホームページ資料
- 3 日本気象協会ホームページ資料
- 4 気象年鑑 1991 2005
- 5 気象要覧 各号

j t w c ホームページ

台湾中央気象台ホームページ

日本気象予報士会 スグダス2 資料
を利用いたしました。

- 1 この発表を作成するにあたり
- 2 藤井健 元京都産業大学教授
- 3 中島保則 日本気象協会
- 4 難波良彰 気象予報士会

- 1 ほかに多くの方々のご協力をいただきました。
- 2 ありがとうございます。